

市区町村における庁内体制はどうあるべきか

提言

誰もが自分の望む暮らしを地域で実現するには、
関係する庁内各部署が横の連携をつくり上げ、
事業をすすめることが大事だ。
それには抵抗勢力の壁を乗り越えなければならない。
摩擦も生まれるし、エネルギーもいる。
だからこそ、楽しく刺激的。
その過程を味わいつつ、大いに揉めて語り合おう。

登壇者

【進行役】	村田 幸子氏	福祉ジャーナリスト
【アドバイザー】	大森 彌氏	東京大学名誉教授
	吉田 一平氏	長久手市長
	秋山 由美子氏	元世田谷区副区長
	望月 迪洋氏	新潟市政策企画部・政策調整監
	小玉 昭子氏	越前市社会福祉課相談支援包括化推進員
	菅原 弥生氏	大館市長寿課長

議事要旨 村田 幸子氏

市区町村は我々の暮らしに最も身近な政府である。従って「共生社会」をつくろうという新しい社会課題に立ち向かう市区町村の姿勢と実践力が、我々の老後の暮らしを左右するカギと言える。そこに立ちはだかるのが「縦割り行政」というこれまでの仕事の流儀。従って分科会2のテーマを言い換えれば「縦割り行政から抜け出すには」ということになる。その共通認識のもとで議論した。

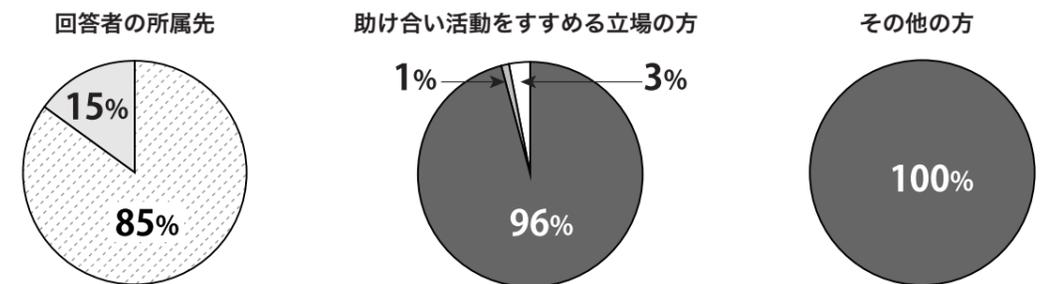
アドバイザーの大森先生は「行政は縦で物事を動かすしくみに長けており、物事を自ら取り込まず他に押しつけようとする特徴がある。縦割りはそう簡単にはなくなる」とまず指摘された。とはいえ、パネリストの方々の実践は、その現状に差はあるものの、横のつながりを見事につくり上げた報告であった。その過程でほぼ共通していたと思われることは、一つに、首長の理解があったということが挙げられる。首長が率先して地域包括ケアシステムづくりに関わった東京世田谷区や新潟市、また越前市や大館市は担当者がその必要性についてきめ細かく説明し、上司の理解を求めていった結果、庁内の理解も深まり、職員の意識も変わっていったという経緯が語られた。しかしそれは、決して上意下達の姿ではな

い。抵抗勢力と粘り強く話し合い、説明する担当者の姿があった。それも行政だけでなく住民をも含めた多彩な関係者による議論であり、その結果、お互いの仕事への理解が深まり、信頼関係に基づいた物を言える関係が動き出したのである。地域のことを理解しだすと、若い職員の眼が輝いてくるという。市民と渡り合える職員が育ったのだろう。

首長としての参加は、愛知県長久手市の吉田市長。我が町のシステムづくりは未だ途上にあると前置きし、目下、住民に苦しんでもらっているという。市民を巻き込むということは時間がかかること。市民が悩み揉めることによって、自ら考える力が養われる。遠回りするほど皆が楽しめるし、そこに役割が生まれる。時間をかけて市民が納得するしくみを実現させるため、庁内体制を整えたいと語った。

いずれ出てくるであろう各市区町村の縦割りを廃した姿を想像する。それは決して一つではなく、地域特性を活かした個性ある姿であると確信する。新しく何かを生み出そうとする時は、大きなエネルギーを必要とする。時代の流れの中で、そうした時代に出会えた幸せを感じながら、各市区町村の変化を見続けていきたい。

アンケートの結果 参加者概数：102名 回答者数：80名



■ 寄せられた声から

- 大森先生の言葉がとてもあたたかかったです。吉田市長の生きたメッセージ、心にひびきました。